

## 日本語の話し言葉における言及形式について(その2)

服部幹雄・江端真紀・滝下治里

### Reference Forms in Spoken Japanese (Part 2)

Mikio HATTORI, Maki EBATA and Chisato TAKISHITA

#### 1. 有名人のRF調査の結果と考察

表1、2が、嫌いな有名人に対するRF調査の結果である。有名人に対してどのようなRFが使われているかはPart Iで既に概観したので、ここではR(言及される人)が好きな人の場合との相違を中心に見ていく。最初に、S(話し手)とA(聞き手)の好みが同じで、Aが友人の場合から考える。ここでは、SはAに気兼ねすることなく、嫌いなRのことを言及できる状況にある。またAは友人であるため、Aが従うと考えられる規範もそれほど顧慮する必要がないと言える。Rが好きな有名人の場合と比較すると、全般に「愛称」・「姓+T1」が減少し、「その他」が増加していることがわかる。Rは嫌いな人であるから、親愛の気持ちを込めた「愛称」や敬称のつく形式が避けられるのは当然のことである。「その他」に属するRFには「バカ+姓」やその人物の特徴を使った蔑称が多かった。ただし、 $F \rightarrow F$ (Rがスポーツ有名人、以下 $R=S$ と記す)における「その他」は約半数が無解答によるものである。詳しく観察してみると、 $M \rightarrow F$ (Rが芸能人、以下 $R=E$ と記す)、 $F \rightarrow M$ ( $R=S$ )においては「姓」の、 $F \rightarrow M$ ( $R=E$ )、 $F \rightarrow F$ ( $R=E$ )においては「姓+名」の増加が顕著である。これはどのように解すべきであろうか。

まず、 $M \rightarrow F$ ( $R=E$ )から検討する。ここではRが好きな人の場合、Rが異性であることに由来する心理的距離の遠さから「姓」が避けられ、「姓+名」が多く選択されると考えたのであったが、Rが嫌いな人の場合、「姓」が増加しているのは無論S-R間の心理的距離が縮まったからではない。現在のところ、「姓」をsolidarity semanticが働いている反映と見ることはできるのは $M \rightarrow M$ の場合に限られるからである。 $M \rightarrow F$ ( $R=E$ )では、「姓」はSによって「姓+名」よりも丁寧さにおいて劣った形式とみなされていると考えるのが妥当であろう。つまり、「姓+名」が客観的なRFとみなされているのに対し、「姓」はやや反感を含む、主に上位者から下位者に対して使われるRFと特徴づけられているわけである。ちなみに、 $M \rightarrow M$ においては、「姓」は逆に減少するか( $R=E$ )、変化が起っていない( $R=S$ )。これは $M \rightarrow M$ では「姓」が心理的距離の近さを表すRF、もしくは客観的な無標のRFであるとの位置づけを与えられていることを示している。ここでは丁寧さにおいて劣ったRFが他にないため、客観的な「姓」を使うか、それでは嫌いな感情が表明できない場合は、蔑称の使用を考えることになる。「その他」の増加はこのようにして説明できる。

$F \rightarrow M$ ( $R=S$ )においても「姓」の増加の理由は $M \rightarrow F$ ( $R=E$ )の場合とほぼ同じ原理で説



表1 SとAの好みが同じで、Rは嫌いな人の場合 (%)

	姓+T1	姓+T2	姓	姓名+T1	姓名+T2	姓名	名+T1	名+T2	名	愛称	T	その他
Aが友人												
S→R												
M→M	6/0	0/3	15/73	0/0	0/0	33/3	0/0	0/0	12/9	3/0	0/0	30/12
M→F	0/0	0/3	18/33	0/0	0/0	61/52	0/0	0/0	3/3	3/3	0/0	15/6
F→M	0/3	2/2	17/55	0/0	0/0	56/23	0/0	0/0	6/5	17/6	0/0	3/8
F→F	0/0	0/0	6/5	0/0	0/0	85/44	0/2	0/0	3/6	0/8	0/0	6/36
Aが先生												
S→R												
M→M	9/0	0/15	3/33	6/3	0/3	61/33	3/0	0/6	3/0	3/0	0/0	12/6
M→F	0/3	0/9	3/18	12/3	0/3	76/48	0/3	0/3	0/3	0/3	0/0	9/3
F→M	3/5	2/12	8/30	2/0	0/5	73/33	0/0	0/0	0/2	12/5	0/0	2/9
F→F	3/0	0/0	3/6	3/2	0/5	86/41	0/0	0/0	3/5	0/6	0/0	2/36

表2 SとAの好みか異なり、Rは嫌いな人の場合 (%)

	姓+T1	姓+T2	姓	姓名+T1	姓名+T2	姓名	名+T1	名+T2	名	愛称	T	その他
Aが友人												
S→R												
M→M	9/0	0/9	15/61	3/0	0/0	42/15	3/0	0/0	9/6	9/3	0/0	9/6
M→F	0/3	0/6	15/24	0/0	0/0	67/48	0/0	0/0	3/3	6/6	0/0	9/9
F→M	2/5	2/3	12/39	2/0	0/2	59/33	0/0	0/0	5/3	17/6	0/0	3/9
F→F	0/0	0/2	6/8	3/3	0/3	77/36	0/2	0/0	6/5	6/6	0/0	2/36
Aが先生												
S→R												
M→M	12/6	0/21	6/30	24/12	3/12	42/9	0/0	0/3	0/0	9/3	0/0	3/3
M→F	6/3	0/18	3/15	30/15	0/6	48/24	6/3	0/3	0/3	3/6	0/0	3/3
F→M	5/8	2/18	6/18	12/2	0/6	64/35	2/0	0/2	0/0	8/5	0/0	3/8
F→F	2/0	0/3	2/6	17/9	0/8	76/30	0/0	0/0	2/2	2/6	0/0	2/36

(数字はある reference form を使用すると答えた者が、該当者全体に占める割合を示す。各項目の左側はRが芸能人、右側はRがスポーツ有名人の場合。略語の意味は次の通り。T1：さん・くん等の敬称、T2：選手、先生等の職業上のタイトル、T：T1とT2を合わせたタイトル、S：話し手、A：聞き手、R：言及される人、M：男、F：女)



明できる。すなわち、この環境でもSによって「姓」は丁寧さの劣るRFと捕らえられている。もっとも $F \rightarrow M (R = E)$ では「姓」の増加が目立たないが、これは、Rが芸能人の場合は、その装飾的性格ゆえに、あるいは「姓+名」が一体として感じられるなどの理由で「姓」が使われにくいことに起因するものであろう。この場合は、客観的なRFである「姓+名」が大幅に増加することになる。 $F \rightarrow F$ においては、Rの好悪にかかわらず、「姓」は極めて少なく、例外的なRFと判断されているようである。この場合、Rに対する嫌いな気持ちを表すには、客観性の高い「姓+名」を使用するか、蔑称を考え出すかのいずれかであろう。「姓+名」( $R = E$ )、「その他」( $R = S$ )の大幅な増加はこうして説明できる。以上まとめてみると、Rが嫌いな人の場合は、(1)愛称や敬称のついた形式を避ける、(2)丁寧さにおいて劣ったRFを用いる、(3)丁寧さにおいて劣ったRFがない場合は、客観性の高い形式を使うか蔑称を考え出す、ということになるが、S、Rの性によって丁寧さにおいて劣った形式、客観性の高い形式の判断が異なってくるのが重要である。

次にAが先生の場合を考えてみる。この場合、好みと同じという点では気兼ねする必要はないが、Aが社会通念上従うと予想される規範から大きく逸脱することは通例避けられ、無難な形式が選ばれることが多い。「愛称」、敬称のついた形式の減少がAが友人の場合ほど顕著でないのはこのためである。つまり、Sは、Rに対する好悪にかかわらず、正式なあるいは丁寧な形式を使用することで、Aとの関係を顧慮していることになる。大きな変化が生じているのは $M \rightarrow F (R = S)$ 、 $F \rightarrow M (R = S)$ における「姓」の増加、 $M \rightarrow M (R = S)$ 、 $F \rightarrow M (R = E, S)$ 、 $F \rightarrow F (R = E)$ における「姓+名」の増加である。「姓」の増加は、 $M \rightarrow F$ 、 $F \rightarrow M$ においては、「姓」が丁寧さにおいて劣ったRFとみなされていることによるものである。芸能人の場合には、もともと「姓」使用を避ける傾向があるため、「姓」は微増に留まっている。 $F \rightarrow M (R = E)$ 、 $F \rightarrow F (R = E)$ のように、Rが芸能人であったり、S、Rが共に女であるような、もともと「姓」が使いにくい環境では、客観性の高いRFである「姓+名」を選択することで嫌いな気持ちが表わされると推察される。「姓」が使いにくい環境では蔑称を使う方法もあるが、Aが先生であるため、これは避けられる傾向にある。 $M \rightarrow M (R = S)$ では「姓」が躊躇せずに使える環境でありながら、「姓+名」が増加しているが、ここでは「姓」は逆に親密な気持ちを表す可能性があることに注意しなければならない。Rに対する嫌いな気持ちは客観性の高い形式の選択によって表さざるを得ないということになる。

以上、SとAの好みが同じ場合を見て来たが、SとAの好みが異なる場合はどうだろうか。好みが違うことをあからさまに表明することは、人間の持つ肯定的顔(positive face)をつぶすことになり、人間関係に軋轢をもたらす危険性がある。SはAとの好みの違いを目立たないようにしながら、Rに対する悪感情を表明することを考えなければならないわけである。ことにAが先生の場合は、相手と自分の意見の相違を最小に見せることに加えて、先生が従うと考えられる社会規範から逸脱しないような配慮も必要になってくる。当然RF選択も慎重なものにならざるを得ないことは容易に予想できる。以下、SとAの好みが同じ場合との比較を中心に考察していく。

Aが友人の場合は、予想に反して、相手との好みの違いがRF使用に明確に反映されているとは言えない。好みが違う場合に、全体を通して蔑称が減り、 $M \rightarrow M$ で「姓+名」が増加し、 $F \rightarrow M (R = S)$ で「姓」が減少しているのが目立つ程度である。全体として客観的、中立的な形式が選ばれる傾向が見られるものの、Aとの好みの違いは大きな変化をもたらしてはいない。これは、Aが遠慮がいらぬ友人であるために、A-Rの関係の顧慮があまりなされないとい



うことであろうが、 $S-R$ 、 $A-R$ の人間関係が現実のものではないことにも関係している。つまり、 $R$ が有名人の場合、蔑称は例外として、 $R$  F使用によって $A$ との好みの違いが直ちに察知されるとは限らない。たとえば、 $S$ が嫌いな $R$ に対して「名」の使用を避け「姓+名」を選んだとしても、これが $S$ の $R$ に対する悪感情に起因するものかどうかは明確ではない。言うまでもなく、 $R$ が $S$ や $A$ と通常の間人間関係にある人なら、 $R$  F使用に潜む、 $S$ の感情や意図あるいは人間性は比較的明確に察知されることが多い。たとえば $S$ が自分よりはるかに年長の知人を「姓」で言及すれば、この振る舞いに通常とは異なる $S$ の意図や感情( $R$ に対する嫌悪など)を感ずるのは容易であろう。結局、 $R$ が有名人の場合は、通常の間人間関係にある者の場合とでは別個の $R$  F選択の原則が働いているということである。

$A$ が先生の場合、相手との好みの違いを反映した $R$  F使用は、「姓+名+T1」の増加、 $M \rightarrow M$ 、 $M \rightarrow F$ での「姓+名」の激減に認められる。「姓+名+T1」は正式かつ丁寧な形式を使おうとする姿勢の表れであろうが、正式な形式である「姓+名」はなぜ減少しているのであろうか。詳しく観察してみると「姓+名」が減少した $M \rightarrow M$ 、 $M \rightarrow F$ では、タイトルのついた形式が増えていて、他の $R$  Fはほとんど変化がない。つまり、「姓+名」の減少分がタイトルのついた形式の増加分となっているわけである。タイトルのついた形式の増加は $A$ が友人の場合には見られなかった変化であり、これは $A$ である先生との関係を顧慮した結果である。つまり、「姓+名」では $A$ に対する顧慮を十分に表すことができないとの判断が $S$ に働いているものと見られる。「姓+名」は丁寧さの点では比較的中立的な形式であり、先生がその使用を社会規範からの逸脱とみなすとは考えにくい。にもかかわらず、 $S$ はこの形式を避け、嫌いな $R$ に対しても丁寧な形式を使用しているのである。言い換えれば、 $S$ が $A-R$ の関係の顧慮に非常に敏感になっているということだが、これはまさに $A$ が先生であるという理由によるものであろう。

ちなみに、先生である $A$ と好み異なる場合、 $R$ が好きか嫌いかによって、 $S$ による $A-R$ の関係の顧慮の度合いが異なっているのはなぜだろうか。つまり、 $A$ が異なる好みを持つ先生である場合、 $R$ が嫌いな人の時は、 $S$ による $A-R$ の関係の顧慮が見られるのに対し、 $R$ が好きな人の時は、特別な顧慮が見られないのである。これは次の理由によるものと推察される。 $R$ が好きな人の場合、 $A-R$ の関係の顧慮の中心となるのは、 $A \rightarrow R$ で使用が予想される $R$  F以上の親密な形式の使用を控えることである。ところが、 $A$ が先生の場合、好みが同じであっても、中立的な「姓+名」やタイトルのついた丁寧な形式が多く使われており、親密な形式はもともと少ないのである。 $R$ が嫌いな人の場合は、 $A-R$ の関係の顧慮の中心は、 $A \rightarrow R$ で使用が予想される $R$  F以上の非礼な形式を避けることである。すると、好みが同じ場合に多く見られた「姓」および「姓+名」以上の丁寧さを持つ形式が選択されることになり、結果としてタイトルのついた形式が増加することになる。

以上の考察結果から、 $S$ は $R$ に対する嫌いな気持ちをいくつかの基準によって $R$  Fに反映させるが、それらの基準に該当する形式は $S$ 、 $R$ の性によって微妙に異なっていること、 $S$ は $S-R$ 、 $A-R$ 、 $S-A$ の関係に状況に応じた顧慮を示し、三者の間で微妙なバランスを取りつつ、 $R$  F選択を行うことが明らかになった。

## 2. 一般人のR F調査

### (1) 方法

ここでは、 $S$ 、 $A$ 、 $R$ が現実の間人間関係にある場合の $R$  F選択について考察する。 $R$  Fデー



タの収集は、有名人のRF調査の場合と同じくアンケート方式によった。被験者が体験しそうなシナリオを作成し、その状況でのRFを答えてもらうという方法である。この方法で得られたデータは被験者が使用するだろうと思っている形式にすぎず、実際の場面で使われる形式と同じであるかどうかの保証はないことは言うまでもない。理想的には実際に行われている会話からデータを収集すべきであろう。しかし、RF使用を支配する要因は極めて多く、さらにRFとそれを支配する要因との関係は極めて複雑で、会話の進行中でさえも微妙に変化していくものである。当然、ある要因のわずかな変化がRF使用に大きな影響を与えることがしばしば起こる。あるRF選択に影響を及ぼした要因が特定できないことも多い。こうした理由から、いくつかの要因を固定できるアンケート方式を採用したのであるが、アンケートに現れた答えは、過去に体験された実際の会話に基づいて被験者に潜在的に内在するものと考えられることもでき、あながち無意味とは言えない。多くの方法でデータを収集すれば、データの信頼性は高まる。今回のデータも他のさまざまな方法によって集められたデータによって補完される必要があることは言うまでもない。

アンケートはMurphy (1988)が使用したものを参考にして作成した。Murphy (1988)では、Rの地位(教授か学生か)およびS-R、S-A、A-Rそれぞれの関係の親疎が制御され、16通り(2×2×2×2)の状況が設定されている。今回のアンケートではS-Rの関係における親疎の区別は設けず、代わりにRの性別を考察対象に加えた。したがって、設定された状況は表3、4に見られるように16通りである。そのほか、被験者の学生になじみのある状況を設定するため、Rの地位を「親密でない先輩」と「親密な同級生」に改変した。この16の状況を表すシナリオを作成し、その中で各状況においてRをどのように言及するかを自由に記入してもらった。2度目以降の言及で用いられる形式が得られるようにしたのは有名人の調査の時と同じである。アンケートには大学2年生女子120名が参加したが、これを4グループに分け、各グループ(30人)がRが共通する4状況について回答した。すなわち、第1グループが状況1～4、第2グループが状況5～8という具合である。

表 3

	A-R 近		A-R 遠	
	S-A 近	S-A 遠	S-A 近	S-A 遠
Rが男の同級生	状況 1	状況 2	状況 3	状況 4
Rが男の先輩	状況 5	状況 6	状況 7	状況 8

表 4

	A-R 近		A-R 遠	
	S-A 近	S-A 遠	S-A 近	S-A 遠
Rが女の同級生	状況 9	状況10	状況11	状況12
Rが女先輩	状況13	状況14	状況15	状況16

## (2) 結果と考察

結果は表5、6の通りである。以下、表にしたがってRFの使用実態を概観する。まず親密



表5 Rが男

言及形式	状況1	状況2	状況3	状況4	状況5	状況6	状況7	状況8
名	13	7	8	2	0	0	0	0
名に由来する愛称	2	1	4	1	0	0	0	0
名+敬称 (くん)	0	10	7	3	1	0	0	0
名+敬称 (ちゃん)	0	5	1	0	0	0	1	0
名+敬称 (さん)	0	0	1	0	0	1	0	0
名+敬称 (先輩、その他)	0	1	0	0	0	0	0	0
名という人	0	0	0	0	0	0	0	0
姓	6	0	0	2	0	0	0	0
姓に由来する愛称	2	0	0	0	0	0	0	0
姓+敬称 (くん)	6	5	8	15	6	1	1	0
姓+敬称 (ちゃん)	0	0	0	0	0	0	0	0
姓+敬称 (さん)	0	1	0	0	14	18	6	16
姓+敬称 (先輩、その他)	0	0	0	0	9	9	19	9
姓という人	0	0	0	0	0	0	0	1
姓+名	1	0	0	2	0	0	0	4
姓+名+敬称 (くん)	0	0	1	5	0	0	0	0
姓+名+敬称 (ちゃん)	0	0	0	0	0	0	0	0
姓+名+敬称 (さん)	0	0	0	0	0	1	0	0
姓+名+敬称 (先輩、その他)	0	0	0	0	0	0	2	0
姓+名という人	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	1	0

表6 Rが女

言及形式	状況9	状況10	状況11	状況12	状況13	状況14	状況15	状況16
名	22	9	15	9	0	0	0	0
名に由来する愛称	2	2	0	0	0	0	0	0
名+敬称 (くん)	0	0	0	0	0	0	0	0
名+敬称 (ちゃん)	3	11	4	1	1	0	1	0
名+敬称 (さん)	1	6	1	3	4	2	3	0
名+敬称 (先輩、その他)	0	0	0	0	1	1	8	1
名という人	0	1	1	0	1	0	0	0
姓	0	0	0	0	0	0	0	0
姓に由来する愛称	0	0	0	0	0	0	0	0
姓+敬称 (くん)	0	0	0	0	0	0	0	0
姓+敬称 (ちゃん)	0	0	0	1	0	0	0	0
姓+敬称 (さん)	0	1	1	5	12	13	1	9
姓+敬称 (先輩、その他)	0	0	0	0	4	9	15	12
姓という人	0	0	0	0	0	0	0	0
姓+名	1	0	2	7	0	0	0	0
姓+名+敬称 (くん)	0	0	0	0	0	0	0	0
姓+名+敬称 (ちゃん)	1	0	5	2	0	0	0	0
姓+名+敬称 (さん)	0	0	0	1	2	2	2	4
姓+名+敬称 (先輩、その他)	0	0	0	0	0	1	0	1
姓+名という人	0	0	0	0	1	1	0	0
その他	0	0	1	1	4	1	0	3

数字はある reference form を使用すると答えた者の数。



さを表すR F(「名」、「愛称」、「名+敬称」)はS-Rの関係が親しい場合にのみ用いられることが大きな特徴として挙げられる。強い親密さを表す「名」、「愛称」は、さらにS-A、A-Rの関係も親しい場合に好んで用いられる。S-Rの関係が親しくても、S-A、A-Rの関係が共に親しくなければ、「名」、「愛称」、「名+敬称」の使用はやや控えられる傾向にある。この場合は、Rが男なら、親密さを表しながらもやや距離をおいた「姓+くん」が好まれる。Rが女の場合は、「姓+くん」と同程度の親密さを表す形式がないため、それに代わるものとして「姓+名」、「姓+さん」の使用が増えている。つまり、S-A、A-Rの関係も親密な形式を選択する要因となっているわけだが、状況2(10)より状況3(11)のほうに親密さを表す形式が多いことから、S-Aの方がやや重要な要因であると言える。Sは親しいRに対して無条件で親密な形式を使用するわけではなく、A-R、S-Aの関係を顧慮しつつ、R F選択を行っていることが分かる。A-Rの関係が遠い状況で、親密さを表す形式が避けられるのは、S-R間の親密な関係を特に強調して、Aに疎外感を与える可能性があるためである。S-Aの関係が遠い状況でも親密さを表す形式が少ないが、これはAが親しい人を言及する時に従う社会規範に合わせようという意識がSに働き、無難で中立的な形式が多く選ばれた結果である。

S-Rの関係が遠い場合は、使われるR Fの種類が少ないのが特徴である。すなわち「姓+敬称」に集中しており、これ以外のR Fはあまり用いられていない。「姓+敬称」は、「姓+さん」と「姓+先輩」とに大別されるが、状況5(13)、6(14)では前者が主流であるのに対し、状況7(15)、8(16)では後者が多い。これは、SがA-Rの関係を顧慮していることによるものと考えられる。A-Rの関係が近い状況で、Sが自分と親しくないRに対して親密な形式を使えば、Aが享受しているRとの親密な関係という権利をSが犯しているかのような僭越な印象を与える危険性がある。「姓+先輩」はそれ自身特に親密さを表す形式というわけではない。しかし、「姓+さん」に比べればより緊密な間柄で使われる形式である。それゆえ、少しでもAの顔をつぶす危険を避けようとするSの気持ちが「姓+先輩」使用の少なさとなって現れていると考えられよう。

続いて、R F使用に見られる性差について考察する。このアンケートではS、Aの性は女で固定してあるため、性差とはRが男か女かで言及のされ方にどのような違いがあるかということになる。顕著な特徴としては、男より女の方がより親密な形式で言及されているということが挙げられる。たとえば、親密な形式がもっとも多く予想される状況1と状況9で比較してみると、女に対してはほぼ7割で「名」が使われ、姓を含んだR Fはほとんど観察されないのに対し、男に対しては姓を含むR Fが約半数を占めている。特に「姓」はRが男の場合だけに用いられており、非常に性意識の強いR Fであると言える。女が男より親密な形式で呼ばれるのは、1つには、SとRが同性であるため、SとRの間の心理的距離が近くなるためである。Rが男の場合、いくら親しくても、異性であるがゆえに心理的な距離が感じられることになる。名を含むR Fより「姓+敬称」のほう好まれていることは、確かにこの心理的距離を反映した結果であろう。だが、心理的距離だけでは十分説明できない部分もある。それは、男だけに「姓」が使われているという事実である。状況1で「姓」が選ばれた理由が、名を含むR Fよりも遠い心理的距離感を表すことだけにあるとしたら、女に対してはすべての状況で「姓」がまったく使われていないことが説明できない。これはやはり「姓」というR Fが、姓を将来に永続させていく者としての男を強調する性質を持っているからではないだろうか。「姓+敬称」はそのような性質を暗示はするが、強調することはないR Fと考えられる。一般に、女を言及するとき、「姓+敬称」使用はまったく問題がないが、「姓」使用には抵抗感が感じられる文脈



が多いことは日常よく体験することである。

### 3. おわりに

以上、日本語の話し言葉に見られる R F の実態を見て来たが、R F 選択は明らかに A F 選択とは異なる原理に支えられていることがわかる。また、R F 使用に投影された性差も明らかになった。ただし、本稿では非常に限られた文脈における R F 使用を概観したにすぎない。またアンケート形式によるデータの収集も問題が残るところである。上述の考察結果は、さらに多くの状況下での実際の会話から抽出したデータによって精密化される必要があろうが、それは今後の課題にしたい。

本研究は名古屋女子大学教育研究所一般研究助成による研究成果の一部である。末尾であるが、付記して謝意を表する次第である。

### 参考文献

- Brown, R. W. & M. Ford 1961 "Address in American English," *Journal of Abnormal and Social Psychology* 62 375-385
- Brown, R. W. & A. Gilman 1960. "The pronouns of power and solidarity," in Sebeok, T. (ed.), *Style in Language* Cambridge, MA MIT Press pp 253-276
- Cameron, D. 1985 *Feminism and Linguistic Theory* London Macmillan
- 遠藤織枝 (編) 1992. 『女性の呼び方大研究』東京 三省堂
- Fasold, R. 1990 *The Sociolinguistics of Language* Oxford Basil Blackwell
- Hinton, L. 1992 "Sex differences in address terminology in the 1990s," in Hall, K. M. Bucholtz & B. Moonomon (eds.), *Locating Power* Berkeley Berkeley Women and Language Group pp 263-271
- Ide, S. & N. H. McGloin 1991 *Aspects of Japanese Women's Language* 東京 くろしお出版
- 菊地康人 1994. 『敬語』東京 角川書店
- Kramer, C. 1975 "Sex-related differences in address systems," *Anthropological Linguistics*, 17 198-210
- Lakoff, R. 1975 *Language and Women's Place*. New York Harper & Row
- Lambert, W. & G. R. Tucker 1976 *Tu, vous, usted A Social-Psychological Study of Address Patterns* Rowley, Mass Newbury House
- 南不二男 1987 『敬語』東京 岩波書店
- Murphy, G. L. 1988 "Personal reference in English," *Language in Society*, 17 317-49
- 小倉千加子 1991. 『アイドル時代の神話 Part II』東京 朝日新聞社
- Reynolds, K. A. (れいのるず= 秋葉かつえ) (ed) 1993 『女と日本語』東京 有信堂高文社
- Romaine, S. 1994 *Language in Society* Oxford Oxford University Press
- Spender, D. 1980 *Man Made Language*. London Routledge & Kegan Paul.
- Thorne, B., C. Kramaræ & N. Henley (eds) 1983. *Language, Gender and Society* Rowley, Mass Newbury House.
- Wardhaugh, R. 1986 *An Introduction to Sociolinguistics* Oxford Blackwell
- Wolfson, N. & J. Manes 1980 "Don't 'dear' me!," in McConnell-Ginet, S., R. Borker & N. Furman (eds), *Women and Language in Literature and Society*. New York Praeger pp 79-92
- 八代京子 1983. 「高校生の呼称」, パン, F. C., 秋山高二, 堀素子 (編), 『機能による言葉の分析』広島文化評論出版